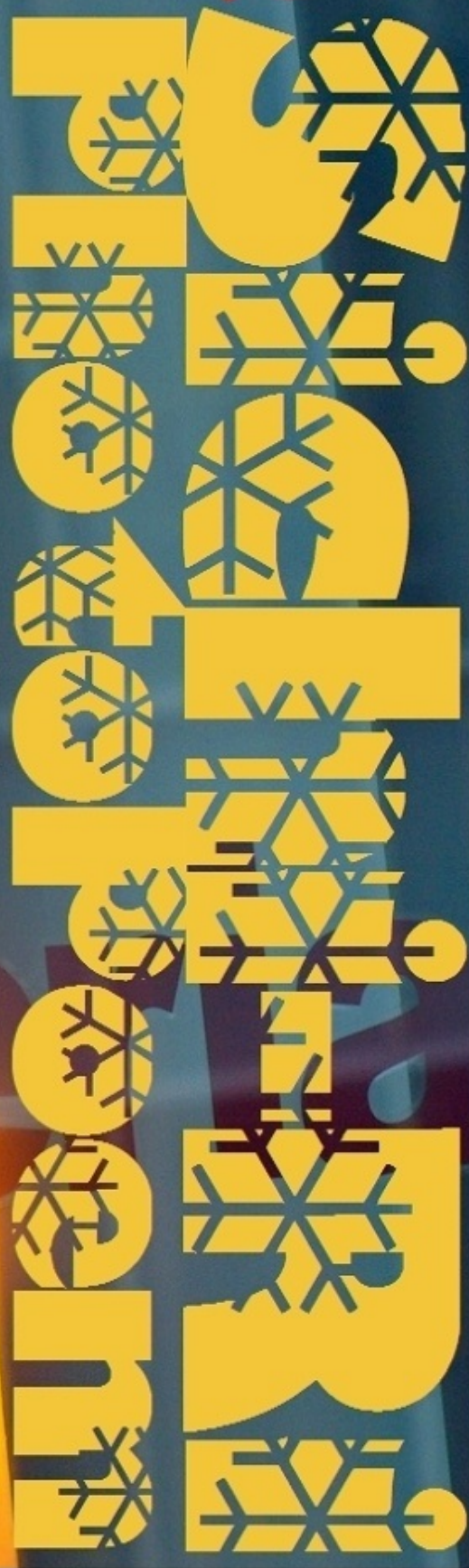


悪事を語り合うぼくらに
快適な場所

after

eternity





ドアの隙間から夕陽のひかりがさしこむように
ぼくらは侵入する
ただ漫然と立ち入るのではなく
兎戯にひとしく つたないながら
悪事を語る用意をする



パイプ椅子のパイプにぼくらの手足がからみつく
つる性植物よろしくからみついたまま伸びちぢみする

ぼくらに花が咲く



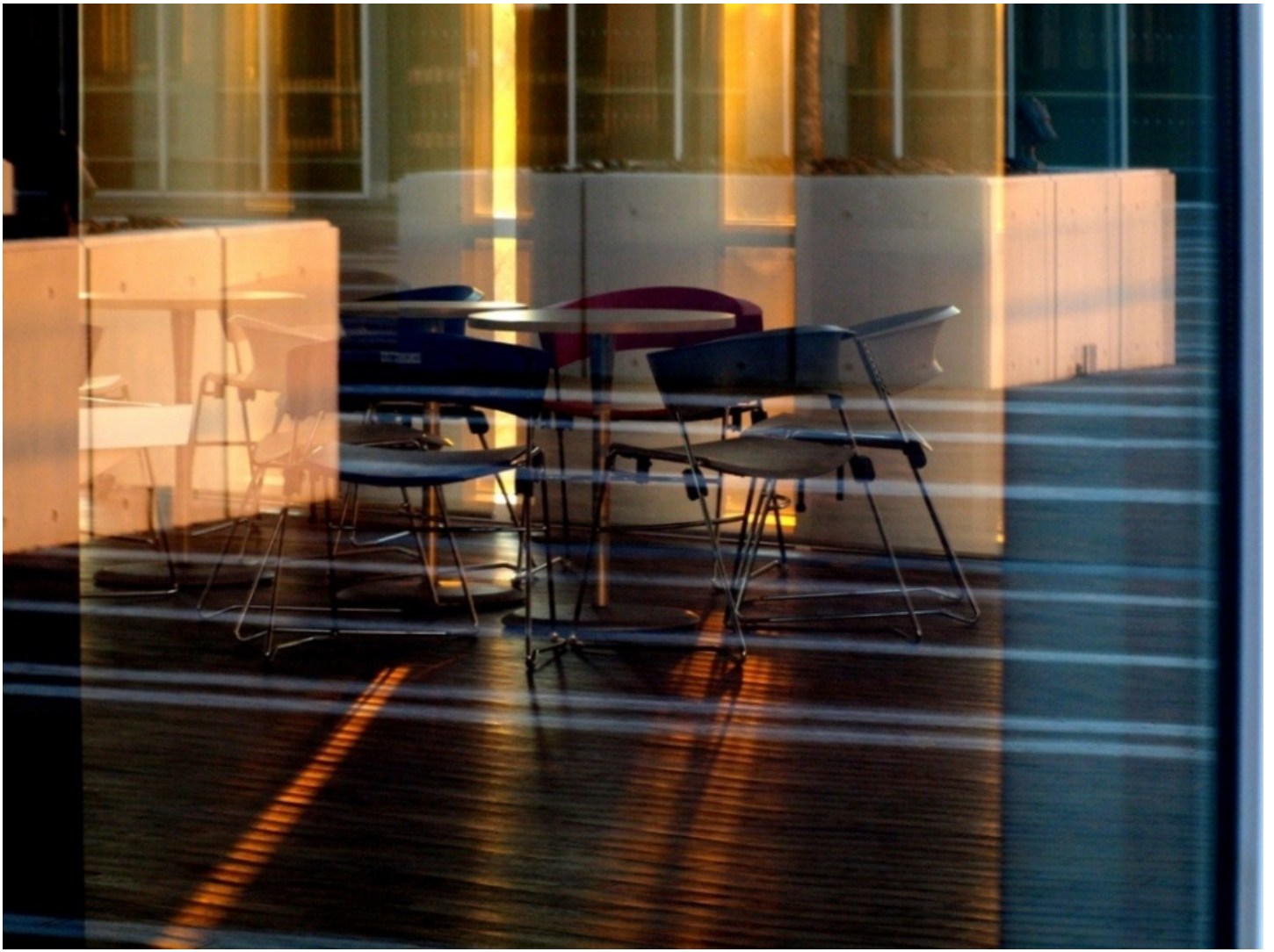
日没にさしかかると
わがくにの山川草木が朱に染まって窓からなだれこむ
かの詩人がいうように、なにかがはじまるにしても
ほんとうのおしまいがくるまでの
はかない時間の出来事である

わがくには日没である



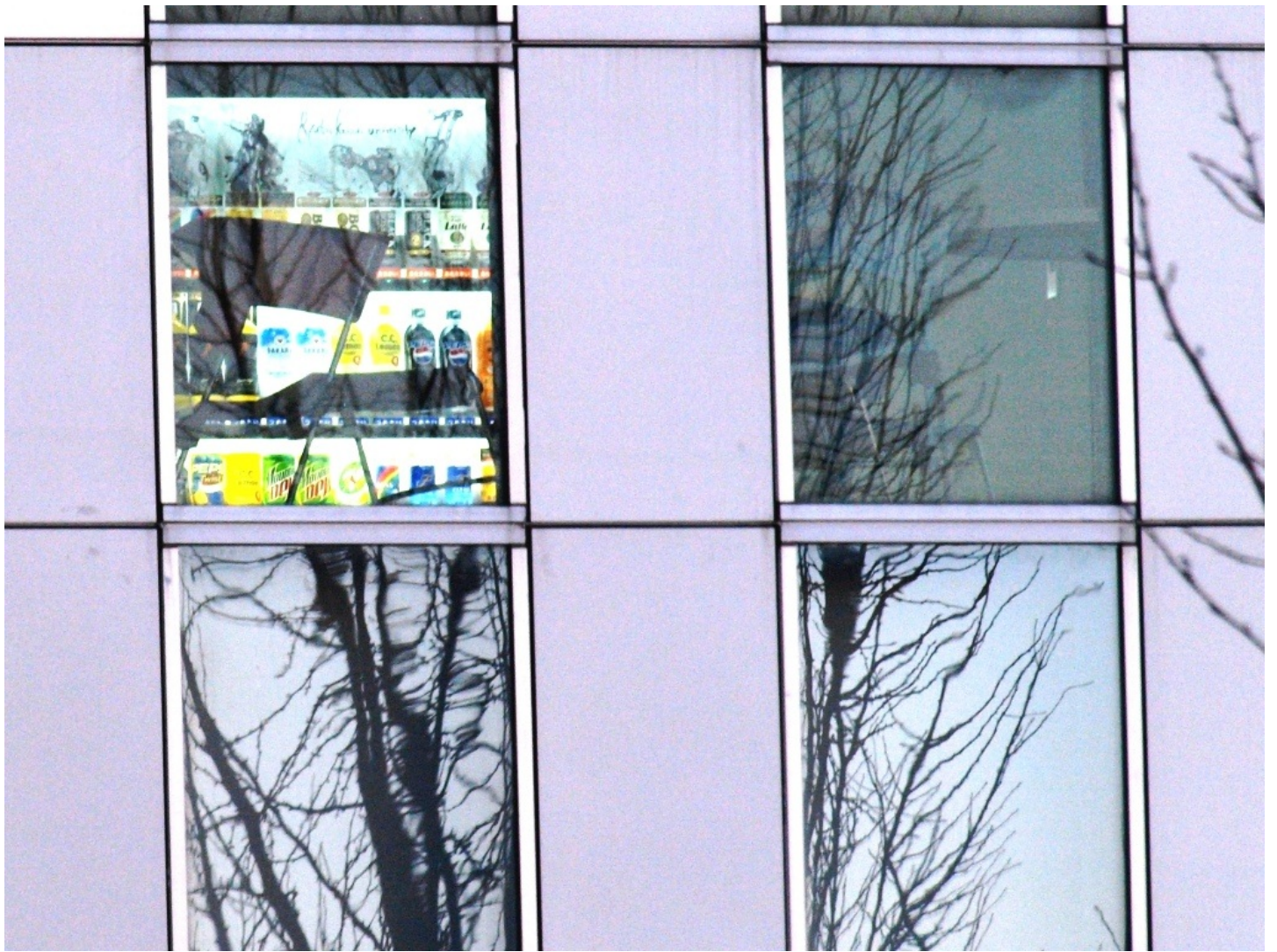
ぼくらの手足も折りたたみ式
四肢を部屋のすみに立てかけたまま
うっかり旅へ出てしまう友もいて

そのご かれの姿を見ることはない



はかない出来事、はかない時間
そういうことどもにさしはさまれた
ゆるぎないものが敷石のように並んでいて
ぼくらはそれを踏んでは跳び
跳んでは踏み

つまづくのを恐れもせず
たまにはふりかえる



いま、悪事を語る快適な場所に

ぼくらはいない

いずれ悪事を語るのに快適な場所はなくなり

ぼくらはいつでも途方にくれるだろう



すべての足跡を抹消すべくシャッターを下ろし
世界を更地にする。





